

# 過去の植生の姿を後世に伝える ～植生調査資料データベースの構築と公開を目指して

## 植生調査資料とは？

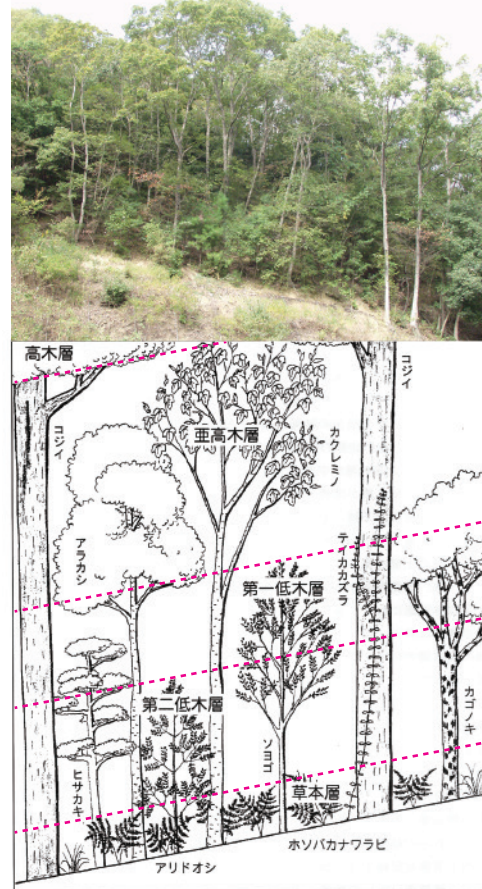
植生とは、森や草原のように地面を被う、様々な植物が共存したまとまりのことをいいます。植生調査資料はこの植生の状態を記録したもので、立体構造（階層）と広がり（植被率）（写真・図1）、各階層を構成する植物の種類と種ごとの繁茂状況（被度）などを記録されています（図2）。日本ではブラン-ブランケの植物社会学的方法による植生調査が一般的で、ほぼ統一された形式で記録されています。戦後、植生学研究や環境影響評価調査などにより国内各地で植生調査がなされ、多数の植生調査資料が存在しています。

植物や、昆虫・魚類・両生類・は虫類などの動物が過去に分布していたことを示す証拠は「標本」です。しかし、森や草原などの植生はそのまま「標本」にすることが出来ません。過去にどのような植生が存在していたかを示す証拠は、植生の「状態」を可能な限り記録した「植生調査資料」が有力なものなのです。

## 植生調査資料を収集・保管・公開する 上での課題

このように、植生調査資料は過去の植生の詳細を伝える貴重な情報ですが、それらを網羅的に収集し、系統立てて収蔵する機関はありません。調査者にとって思い入れのある植生調

査資料は、生前に他者に寄贈されることが少なく、その多くは研究者の退官や死去により散逸しやすいという課題を抱えています。戦後盛ん



写真・図1  
(写真)クヌギ二次林の植生断面の様子(図)植生断面の模式図。階層の境界を赤の破線で示した。

に収集された膨大な記録の多くが失われる危険にさらされているのです。

## 過去の植生の姿を後世に伝えるには？

これらの貴重な植生調査資料の散逸を防ぐためには、それらを古文書のように物理的に保管するとともに、デジタル化してデータベースとして公開し、多くの人に学術的・社会的に活用

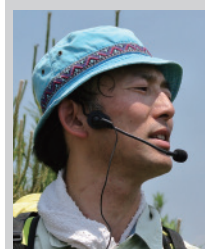
図2  
植生調査資料の記入例。この植生調査資料では、出現種の被度を一般的な被度階級値ではなく、被度百分率で記録している。

されるよう管理するのが望ましいでしょう。しかし、植生調査資料データベースの公表方法も十分確立されていません。

そこで、ひとくくでは植生調査資料データベースの構築・公開を試み、その有効活用と継続的集積を行う上でのメリット・デメリットを明らかにするとともに、植生調査資料の社会的共有の促進に貢献する運用方法を確立するための研究に着手しました。現在は、武田義明神戸大学名誉教授が調査し保管してきた約9000点の植生調査資料（写真3）の整理とデジタル化を進めています。またインターネット上で公開するデータベースのシステム開発を行っています。平成28年度には試行的に公開する予定です。



写真3  
武田義明神戸大学名誉教授が調査・保管してきた植生調査資料の一部。研究テーマごとに紙ファイルで保管されている。



## 植生資料データベースの構築・公開

代表者：橋本佳延

分担者：石田弘明、黒田有寿茂

協力者：武田義明（神戸大学名誉教授）、小林節子、一町裕子、馬渡朝子

財源：JSPS 科研費（15K16281）